

各地で話題の病虫害

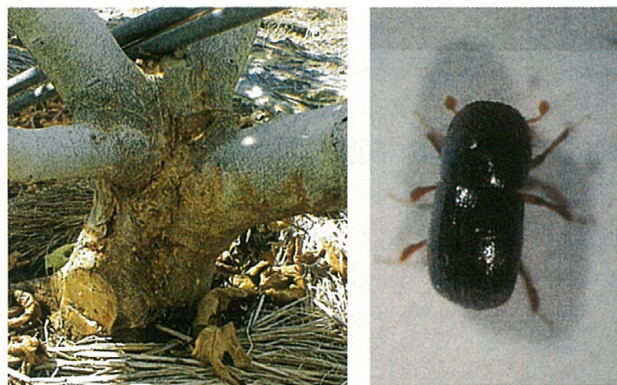
アイノキクイムシ

学名：*Euwallacea interjectus* (Blandford)

大阪府のイチジク園で1998年頃から糸状菌によるイチジク株枯病が目立つようになり、それとともにイチジク株枯病菌の媒介虫として疑いのあるクイムシが発生した。

2002年8月、大阪府食とみどりの総合技術センター等の調査によりクイムシが採集され、独立行政法人森林総合研究所での同定の結果、アイノキクイムシであることが判明した。

本種は、イチジクを枯らすイチジク株枯病菌の媒介虫であることが明らかになっており、福



大阪府病虫害防除所 岡田裕彦氏提供

岡県で発生している。海外では、東南アジアに広く分布し多くの樹種に寄生する。

雌成虫の体長は3.4～3.8mmで円筒形をした黒褐色の養成菌クイムシであり、翅鞘の背面はほぼ均一な光沢を備え、斜面部は翅鞘中央の前方から始まり、ゆるやかに傾斜する。

成虫で越冬し、4月上旬から5月上旬にかけて越冬世代成虫が移動分散し、7月中旬から8月下旬にかけて夏世代成虫が移動分散する。

樹勢の弱ったイチジクの樹幹部を食害し、多くの孔を開ける。また、株枯病菌を媒介し枯死させる。なお、本種は大あごの基部に菌のうを持っているが、福岡県で採集された個体では主として翅鞘から株枯病菌が分離されている。

本種の発生生態や防除法に関する研究が行われており、防除対策の早期確立が望まれる。

ヨツモンカメノコハムシ

学名：*Lacoptera quadrimaculata* (Thunberg)

2002年5月、鹿児島県でサツマイモの葉を食害するハムシが発見された。

鹿児島県病虫害防除所が調査した結果、ヨツモンカメノコハムシであることが判明した。

本種は沖縄県で周年発生しており、1999年には長崎県で発生が確認されている。海外では、中国南部、台湾、インドシナ、ミャンマー、インドに分布しており、サツマイモの害虫として知られ、ノアサガオにも寄生する。

成虫は、体長が7.5～9 mmで体背面は強く隆



鹿児島県病虫害防除所 上福元彰氏提供

起し、背面は褐色で外縁は黄褐色で透明であり、前胸背板は複雑に隆起したしわ状となっており、上翅間室にも顕著な隆起条が見られる。体腹面は黒色の後胸腹板を除き赤褐色である。

産卵は1～7卵を2層の膜につつま葉面に産みつけ、その上に糞を塗りつける。

終齢幼虫は体長8 mm程度で淡褐色であるが、背面側部は暗褐色である。また、糞塊をつけたままで葉面で蛹化する。

幼虫、成虫とも主に展開葉を食べ、サツマイモ、ノアサガオなどの葉の中心部に虫食い状の穴を開ける。食痕は、ほぼ楕円形で長径4～8 mm、短径3～4 mmであり、多発生した場合はサツマイモの葉が穴だらけになる。

本種に対する登録農薬はなく、有効な防除薬剤の登録等防除対策の確立が望まれる。